



HACK

|

邂逅



# 1.邂逅

---

## HACK

### 1 邂逅

午後の業務が始まってすぐにと、レスリーは上司に呼び出されていた。

正確には、直属の上司ではなく、お隣の部隊の中隊長にだが、平の事務員であるレスリーにとって、上官であることは違いない。

指示通り、昼休みあけにすぐ、レスリーはその上官の部屋に向かっているわけだが、緊張と同時にわくわくもしていた。ちょっぴり顔がにやけてしまっている自覚もある。まあ、周囲には気付かれない程度ではあるけれども。

なぜかという、これから会う予定の、お隣の部隊の中隊長は、とびきりのイケ男だから。女性職員内恒例の人気投票では、常にトップ。レスリーだって密かに憧れている。彼に呼び出されていると知った周囲の羨望のまなざしはいい気分だった。

初めて入る部屋の前、レスリーは姿勢を正し、ノックをした。「入れ」の声はすぐにかえってきた。

「失礼します」

完璧な礼儀作法で入室したレスリーは、さっと室内の様子に目を走らせる。室内には男が三名。お目当ての中隊長は部屋の中央にいた。

(くー！ やっぱイケ男！)

正面の執務デスクの前に立っているのが、一中隊長のドミニク・マナーズ。ごつい戦闘員が揃っている一中隊の中では、華奢に見えるぐらいに細いが、中隊一の戦闘力を持つと言われている。

すらりとした長身で、モデルのようなスタイルのよさ。そして、軍人にするには勿体ないほどの、気品のある顔立ちをしている。金の強い栗色の髪はサラサラで、知的でノーブルな瞳はグリーン。うっとりするほど軍服がよく似合う。

(足長い、顔小さい、腰細い！)

「二中隊所属のレスリーです」

(近くで見ると、髪きれい。色白い。睫毛長い)

(眼福すぎるー！)

などなど、頭の中では黄色い悲鳴をあげながらも、レスリーは教科書通りの敬礼をする。

常に冷静沈着、成績優秀、無口でとおっているレスリーが、頭の中だけは誰より雄弁なことを知っている者はごく限られている。

「呼び出してすまない」

(声もいいなんて、完璧よ)

「とんでもありません」

(いつでも呼んで。っていうか、一中隊に転属したーい！)

「今日は君にお願いがあるんだ」

(なんでも言って。っていうか、秘書官にしてください！)

「命令ではなくて、ですか」

ドミニクは口元に苦笑を浮かべた。

(きゃー！ チャーミングすぎる！)

「まあ、そう。君には拒否権がある。厄介な任務だから」

と、ドミニクは、レスリーから視線をそらし、室内の一方に目を向けた。

今まで、ドミニクにしか目がいかず、室内の他の存在を無視していたレスリーは、そこでようやくドミニクの視線を追ってその存在に目を向ける。

一人は、一人掛けのソファにゆったりと足を組んで座っていた。四十代ぐらいだろうか、グレイの瞳が印象的な魅力的な男性。だが、軍人ではないように思えた。

そして、もう一人は、部屋の壁にもたれかかって立っている。長身で細身。淡い色のブロンドを無精たらしく肩までのぼして、顔は隠れていた。

(げ。なんかきちゃない)

服装もどことなくだらしが無い。ウエストのベルトは、穴もう二つ分きゅっと閉められそうだし、シャツも必要以上にパンツから出ているように見える。袖口のボタンがあいているのも気になるし、指の爪も整っていない。

「軍の顧問をしている、レイ・アスティン」

「はじめまして」

ソファに座っていた男性が立ち上がって、握手の手を差し出してきた。

(素敵な方。聞いたことある名前だ)

確か、IT関係の会社の社長。民間企業だが、軍とは取引もある。

「よろしくお願いします」

(すごい雰囲気のある人。社長さんだし、もてるだろうなあ)

近づいてみると、細身で引き締まった体つきは若々しいが、まっすぐにレスリーを見る瞳には深い知性と落ち着きがある。見た目よりも年上なのではないかと思われた。

「もう一人は、ジュリアス・マナーズ」

ファミリーネームが、ドミニクと同じことに、レスリーはすぐに気がついた。

ドミニクへと視線を向ければ、彼は苦笑を口元に浮かべて頷く。

「弟だ。休職中だが、一大隊所属の軍人でもある」

「一中隊ですか？」

ドミニクに兄弟がいるのはどこかで聞いたことがあるような気がするが、軍に所属しているというのは初耳だ。

「大隊直属だよ」

鉄仮面と噂されるレスリーにも、驚きを顔に出さないようにするのは至難の業だった。

ドミニクの弟が軍に所属していたなら、噂にならないわけがない。女性には勿論、部下や上官にも尊敬信頼されているドミニクだ。弟が入隊してくれば絶対に注目される。それ以前に、ドミニクの弟だということは、この軍の総司令官の息子ということだ。噂にならないわけがない。だが、大隊直属ということになれば、事情は変わってくる。

(初めて見た.....)

まじまじと観察しているようには見えないように気をつけながらも、レスリーは壁際に立つ、汚い男に視線を向ける。

大隊直属ということは、一般的に超能力というものを持っていて、その能力を生かして任務をこなしている、ごく限られた軍人。諜報活動や潜入活動を多く行うため、一般の軍人たちとは接触はほとんどない。レスリーのような事務官は、本当にそんな軍人が存在するのか、都市伝説のように捉えている人も多い。だがそれは、異能力者が珍しいということではない。

この国には、異能力者と呼ばれる超能力者が、昔から多く存在すると言われている。昔話の中に、その能力で人々を助けてくれる善人として、リーダーとして語られていることが多い。今でも山のほうに行けば、そういった異能力者の末裔が住んでいると言われているし、友人知人の中には能力者とまではいかなくても予知夢をみたり、スプーンぐらいならひよいと曲げる念動力があったりする人も普通にいる。異能力者といっても、身近な存在であることは確かだ。

だが、大隊直属の異能力者となると、レベルが違うのだと、レスリーも聞いたことがある。それこそ、岩をも砕く念動力や、触れただけで人の心を読んだり、遠く離れた場所の様子が見えたり聞こえたり。兵器として使えるぐらい、彼等の能力はずば抜けている。現代のスーパーマン。

(.....この人が?)

口の端がひくひくしないように我慢するのに精一杯で、胡乱な眼でそのスーパーマンを見てしまったかもしれない。

俯いていた汚いスーパーマンがちらりと顔を上げ、レスリーのほうを見たようだった。長い髪が顔の前に垂れ下がり、目がどこにあるのかもよくわからないので、あくまでそんな気がしただけだが。

「ジュリ、挨拶」

兄弟に違いない気安さで、ドミニクが声をかけた。

一拍おいて、ジュリと呼ばれたドミニク弟は、もたれかかっていた壁からゆらりと立ち上がり、レスリーの方に一步近づいた。

「.....はじめまして」

「はじめまして」

レスリーもすっと一步近づくと、差し出された手に躊躇なく手を伸ばす。その動作にも表情にも、相手が珍しい人種であることに対する好奇心は一切垣間見えなかった。人気者の弟であり、現代のスーパーマンと握手をするのではなく、初対面のごく普通の人と握手する、それ以上でも以下でもない。勿論、内心でレスリーは自分がそう見えるように細心の注意を払っていたのだが。

「あっ」

ぎゅっと手を握った瞬間、静電気のような、ぴりっとしたものが、レスリーの体に走る。咄嗟に手を離し、ぱっと後ずさる。

(なに、今の)

触れ合ったことによる静電気に似ていたが、そうではない。それなら、指先から電気が走ったはず。ぴりっとしたのは、心臓のあたりだった。

(静電気が心臓に走ったら死なない？ ってか痛い！)

視線を感じて、顔を上げる。そして、長い髪の向こうに隠れていた、ジュリアスの目を、初めて見た。

驚いたように目を見開き、レスリーを凝視している。その瞳は、兄のドミニクによく似たグリーン。より深く濃い色のグリーンだった。

(やっぱり、静電気？ 彼もぴりっとしたのかな)

(だとしたら、帯電してたのは、彼の方だよね。私はレイと握手したとき、何ともなかったし)

(彼も帯電体質？ とりあえず、謝ったほうがいい？)

年齢は同じぐらいに思えるが、相手は現代のスーパーマンだし、謝っておいたほうがよさそうだ。

「申し訳ありません。私、乾燥体質で、乾燥してるとよく帯電してるんです」

「……いや」

レスリーを凝視していた視線を、彼はようやく外した。

俯いて、そして、右手で顔にかかる髪をかきあげながら、また視線をあげる。それでようやく、彼の顔の全貌が明らかになった。

(おっ。さすが、ドミニク弟。美形)

細面の気品のある顔立ちは、ドミニクによく似ている。ただ、神経質そうで、中性的だった。

明るくて人好きのする兄に比べ、ジュリアスは人を寄せ付けない感じの、整いすぎともいえる美貌はどこか冷たい感じさえする。色が白く、髪の色も淡いのに、瞳だけが濃い色合いなのがとても印象的で、目が離せない。

(この派手な容姿で、潜入とか出来るの？)

(もしかして、007みたいに、敵の女スパイとよろしくやっちゃう系？)

(本当に軍人？ 細すぎない？ がりがりだし)

(これで念動力で岩くだいちゃったら感動だけど。違う感じよねえ)

(大隊直属って、司令官の息子だから特例とか？)

(うーん。そういう身内びいき、しなさそうな方だけどなあ)

「……まれ」

何か、ぼそぼそと、ジュリアスがつぶやいた。だが、声が小さすぎて誰も聞き取れない。

(なんか暗くない？ 格好もヤバイし。引きこもり？)

(顔はいいのに、もったいないなあ)

「……まれ」

またつぶやいたが、ちょっとしか聞き取れない。

「ジュリ？」

ドミニクが小首を傾げ、ジュリアスの顔を覗き込むようにした。

そのドミニクの表情が、とてもキュートだった。

(いやーん。可愛い)

「だまれ」

今度は聞き取れる声で、ジュリアスが言った。

「え？」

ドミニクが首をかしげ、ジュリアスの視線を追う。そして、レスリーと目が合った。

(私?)

ジュリアスは、レスリーの顔を見て言ったのだ。だまれと。

(なに、なんなの)

レスリーは、先程から必要最低限のことしか話していない。普段から雑談もほとんどしない、無口な女性で知られているぐらいだ。

「だまってくれ」

と、ジュリアスは顔をしかめ、両手でこめかみのあたりを押さえた。

まるで、レスリーがおしゃべりしすぎて五月蠅くて我慢できないと言わんばかりの態度だった

。

「……私、ですか？」

不覚にも、声が少し震えてしまった。

「ジュリ？」

確かめるようなドミニクの問いかけに、ジュリアスは小さく頷いた。

(私? なんで? 五月蠅いって、どうして)

「大丈夫だよ、落ち着いて」

不意に腕に触れられて、驚いて振り返ると、ソファに座っていたはずのレイが、すぐそばに立っていた。

そして、とても優しい笑顔で、レスリーをなだめるように、ぽんぽんと腕を叩いてくれる。

「ジュリアスは、テレパシストなんだ。人の心の声が聞こえちゃうんだよ」

「え」

「怯えないで。なんでもかんでも聞こえるわけじゃないんだ。さっき、握手しただろ? その時に、君と彼の間にはホットラインが出来ちゃったんだ」

「は？」

「今、君が考えることは、全部彼に聞こえてしまう。君が混乱すると、その混乱は彼に伝わる。だから、落ち着いて。心を静かにすれば、なんということはない」

「で、でも」

「落ち着いて。疑問は全部、口に出して聞いていいから」

ぽんぽんと優しく叩いてくれるリズムに合わせて、心を落ち着かせようと、レスリーは試みる

。 考えていることが聞こえるのなら、何も考えなければいい。落ち着いて、心を無にすればいい。いつもは、ポーカーフェイスの内側で色々考えるけれど、今は逆にすればいいというだけのこと。

(それって、難しくない?)

「声に出せばいいんだよ」

まるでレスリーの心が読めているようなタイミングで、レイがそう助言してくれた。

「彼はすごく優秀なテレパシストなんですか？」

「まあ、そうだね。でも、コントロールが下手みたいでね、うまく君の思考を自分の外に追い出せないでいるね」

ジュリアスを見ると、苦しげに顔をしかめ、ドミニクの肩にもたれかかるようにしていた。

似たような美形の男が二人、抱き合うようなその姿は、女子をとぎめかせるには十分素敵で。

「だまれって！」

つい色々妄想したら、途端にジュリアスに睨まれてしまった。

ちゃんと聞こえている証拠に、ジュリアスはドミニクの腕の中から出ようと、もがき始める。

「何がどうなっているのか、説明してほしいんだけど」

と、困惑した顔のドミニクが、レスリーとレイを見る。

レイに、説明して?という顔で見られたが、勿論、レスリーは首を横に振る。ドミニクにこんな阿呆な妄想を聞かせるわけにはいかない。

「俺ならいいって？」

睨んでくるジュリアスに、レスリーはむっとする。

(誰だって、頭の中の思考は自由よ)

「今は俺に聞こえてんだから、遠慮しろ！」

(勝手に聞いてるくせに、私が悪いみたいな言い草、やめてちょうだい)

「俺だって悪くない！」

(私はもっと悪くない。女性の頭の中を見るなんて、やらしすぎよ)

「だから、俺は聞きたくて聞いているわけじゃ」

(それで、私に黙れって、おかしくない? あなたが聞くのをやめればいいのかよ)

「あんたが聞くに堪えないことを言うから」

(私は普通のことを考えてるだけよ。なに、司令官のみびいきとか考えたの恨んでるの?)

「当たり前だ。失礼だろ」

(勿論、私だって面と向かっては言わないわよ。でもね、そう思う人はたくさんいるわよ。悔しかったら、その格好、なんとかしたら)

「な、何を」

怒りのためか、痛いところをつかれたせいか、ジュリアスが口ごもったのと、ドミニクの明るい笑い声が聞こえたのは、ほぼ同時だった。

レスリーはいつもの無表情で(ちなみに、ジュリアスとの頭の中だけの喧嘩中も、無表情だ

った)、ジュリアスは驚いて、ドミニクを見る。ドミニクはとても楽しそうに、二人を見て笑っていた。

「よかったよかった。レスリーとジュリの相性はよさそうだね」

「は？」

「ドニ、今のどこをどう見てたら、相性がいいと思えるんだ」

「いいよ、ねえ、レイ」

話を振られたレイは、にっこりと微笑み頷いた。

「僕もそう思うよ。レスリーとなら安心だな」

「ですよね」

うんうんと頷くドミニクに、レスリーは厳しい視線を向ける。

「もしかして、私に頼みたいことって」

「ご明察。ジュリアスと組んで仕事をしてほしいんだ。勿論、ちょっと秘密な仕事をね」

「お断りします」

「俺だっでごめんだ！」

即答で二人は断ったのだが、ドミニクは楽しそうに、嬉しそうに声を上げて笑う。

まるで、二人から即答のイエスもらったかのような満足そうな笑顔に、レスリーもジュリアスも、毒気を抜かれたように閉ざした口をへの字に曲げた。